今月の
選者

バゼル山本登紀子

(ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部)

「裏話」を知って「表」を見る

情報管理 54(5), 296-299, doi: 10.1241/johokanri.54.296 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.296>)

日本について研究する米国の大学院生に例えば辞典などの参考リソースを教える際、その辞典の特徴を理解し、複数のリソースを活用し得られた情報を吟味する大切さを伝えるように努力している。ただ、うまく学生の興味を刺激し、知らない単語を辞書で引く以上の「辞書を読む」ところまでの面白さにまで手助けできる授業を作り上げるのは簡単なことではない。どんな例やエピソードを授業に盛り込むべきか、いかに彼らの知的探究心を育てることができかを常に思案する。加えて、教える立場の自分も発見の楽しみを味わいたいと思う。そんな時、辞典という「表」の部分だけを取り上げるのではなく、その辞典がどのような背景から編まれたのか、編者の意図するものは何なのか、知っておくと便利な情報など、実際にその辞書作りに携わった人物が明かす「裏話」を知ることで「表」の部分がより面白くなっていく。そんな知識を深めてくれる本を紹介したい。

『「広辞苑」物語—辞典の権威の背景』新村猛
芸術生活社、1970年（絶版）

本校の学生が使う電子辞書に必ず入っているのが『広辞苑』である。手軽にアクセスできるこの辞典が勉強の入り口になっていると言えるかもしれない。『広辞苑』と言えば出版社にして「1100万人の読者を持つ国民的辞書」と言わせる半世紀以上のロングセラーの辞書である。まずは『広辞苑』を引いて、が当たり前になってしまい、編纂された時の背景や辞

<http://www.lifeisart.co.jp/index.html>

書としての特徴を考えたり、他の辞典と比較したりすることをつい怠ってしまいがちである。この辞書が重宝されている1つの要因は、言葉そのものの意味だけでなく百科事典的情報が簡潔に提供されているからと言われるが、本書はその辺の詳しい背景を明らかにしてくれる。

著者は『広辞苑』の生みの親、新村^{いずる}出の次男である。『広辞苑』第2版が完成した40年以上も前の発刊であるが、著者自身がその編纂に携わった直後であり、また新村出が発刊の2年前に亡くなったこともあり、臨場感あふれる辞書編纂の実情が語られている。新村出は上田万年に教えを受けた文学者で大槻文彦の意思を継いで『大言海』の編纂を手がけ、近代辞書の誕生期を生きた。大辞書の編纂を夢見て果たすことができなかったが、新村出の日本語への執着と辞書への理想は現在の『広辞苑』に引き継がれており、言葉がどのように配列され、書き直されて『広辞苑』

に反映されているかを具体的な事例から学べるのはありがたい。

さらに、編纂者の理想と出版という商業事情、その中で繰り広げられる出版人との関係が見えてくる。新村出は、大辞典編纂を国家的事業として進めたかった夢は結局達成できなかったが、岡書院を営む出版人岡茂雄の誠心と信念に動かされて「不本意ながら」中型辞書編纂を引き受けることになる。本書からこの事業が向かい合った現実、当時の歴史的事情がからみ戦前・戦中・戦後における辞典作りの苦難を知ることができる。またそれは、この時代の日本の出版界の苦闘にもつながるのである。資金事情から『辞苑』が岡書院ではなく博文館から出版され、それを継ぐ『広辞苑』が岩波書店から発刊されることになった背景からは辞書作りそのものの苦労に加え、編者と出版人との関係、そして日本における出版という事業を垣間見ることができる。

『大漢和辞典と我が九十年』鎌田正
大修館書店、2001年、2,625円（税込）

<http://plaza.taishukan.co.jp/shop/product/detail/30420>

漢字の世界で絶大なる権威を持つ諸橋轍次の『大漢和辞典』。1955年版の13巻、1989年版15巻を米国の学生が使う機会は多くはないが、この大辞典の知識はしっかり学んでほしいと思いつつ、私自身正直言ってこの辞典の規模に圧倒されてしまう。辞書の

紹介をする際によく用いる「この大辞典には5万語の親字が収録され…」云々とは違った授業への導入方法はないか、と思案している時に出会ったのが諸橋の弟子で大漢和辞典編纂に人生を懸けた鎌田正の自叙伝だった。前半は少壮年時代を振り返った思い出、恩師と仰ぐ諸橋との出会い、漢学者への道、東京高等師範学校での教育者としての生活がエピソードを交えて語られており、著者の信念・哲学が形成されていく様子を知ることができる。後半は著者が諸橋とまた恩師亡き後の意思を継いで第2版まで編纂し続けた『大漢和辞典』との60年もの苦楽の軌跡である。およそ漢文には疎い私にとってうれしいのは、鎌田が諸橋を語り、恩師とのやりとりを読み進めるうちに、『大漢和』の編纂動機、諸橋の漢和辞典に込める信念、『大漢和』編纂の骨格に自然に引き込まれていくこと。東京大空襲で原稿がすべて焼失した話は有名であるが、実際にそこに居合わせた当事者の記述からは、信念を貫く人間の不屈な精神が重みをもって伝わってくる。また僭越な言い方で恐縮だが、これまで大博士に対する畏敬の念だけを持っていた私も、鎌田の尊敬と愛情あふれる恩師への記述から諸橋博士の優しいお人柄に触れることができたような気がする。

さてここでも出版人とのドラマが展開される。まだ無名であった大修館の鈴木一平社長は「使って便利な」「真似のできない」「後世まで残る」ような「一冊もの」の漢和辞典出版を目指し、1年以上かけて諸橋博士を説得しこの事業を始めた。35年後に全13巻の刊行を終えるまで、一冊ものが多巻となり、戦争あり、誤信による鎌田の死亡説あり、異なる分野で各々活躍していた鈴木一平の3人の息子が出版業に転職し、この大事業存続を可能にしたりと、辞典作りの実録歴史ドラマが繰り広げられる。辞書の使い方だけでなくこの日本精神と出版文化は絶対に学生たちに伝えるぞ、と決心を新たにした。

『国語辞典はこうして作るー理想の辞書をめざして』 松井栄一

港の人, 2005年, 2,310円(税込)

http://www.minatonohito.jp/products/050_01.html

辞典作りに携わってきた人が語る辞書編纂の「裏話」の3冊目は『日本国語大辞典(日国)』の編集委員松井栄一の本。30年ぶりに第2版が出版された後に第1版出版直前の1970年から1994年ごろまでに雑誌・学術誌に発表した辞書に関する論考をまとめたものである。ありがたいのは1つ1つの言葉・例が具体的に解説してある非常に実践的なもので、しかもその言葉や例が後の『日国』でどのように扱われたかの後日談がそれぞれについていること。勝手至極で恐縮だが「これ、授業で使える！」ものばかり。『日国』と言え、100万にも及ぶ他には類を見ない用例数を誇る辞書である。なぜそこまで多くの用例にこだわるのか、近代文献からの引用に問題があるのはなぜか、どうして底本をはっきりさせる必要があるのか等々、『大日本国語辞典』の編纂者の一人祖父松井簡治以来3代にわたって辞書・言葉とともに生きてきた著者のこだわりを学ぶことができる。加えて本書には、著者が言葉・用例を探ること、辞書を作ることが心底好きで楽しんでいる様子が各所に自然に表れていて読む者を魅了する。

「国語辞典に親しむ」の章で示されている「辞書を読み」「辞書を通して考える」習慣を学生たちに伝え

ることを工夫すべし、と誓った。

『出版社大全』 塩澤実信

論創社, 2003年, 5,250円(税込)

<http://www.ronso.co.jp/index.html>

最後のオスズメが出版社120社の「裏話」を集めた866頁の本。私の愛読書兼参考書である。北米では学術専門書の大部分は大学出版局と限られた専門の出版社が発刊している。つまり英語の学術書を選書する時は、それらにターゲットを絞っておけばかなりの水準の本を蒐集することができるが、日本語書籍の選書はそうはいかない。日本には江戸時代から続く出版社からつい最近独立して1人で創業したというものまで、多岐にわたる出版者が多種の専門書を発刊している奥深い出版文化が存在する。しかも創業者は多くの場合、日本の教育・知的文化への強い信念・哲学・覚悟があつて出版人となり、その精神が出版社に引き継がれ出版物に反映されている。さらに、出版人と著者には密な関係が育まれていて、そこから特徴ある専門書が創作され水準が保たれた出版物が発刊されていることが多い。

本書は出版社(者)・出版業界に詳しい著者が『日販通信』に10年間連載した出版社の横顔をまとめたものである。「当事者の証言で記述」し「読ませる出版社事典」を目指したとあるが、まさに一社一社の「裏話」が面白く、読み応えがあり、出版人の哲学・出

版姿勢を学ぶことができる。本書が紹介する「裏話」から書籍と出版者の「顔」が浮かび上がり深みが加わり、多次元から本を楽しませてくれること、そして日本の出版文化史の面白さを授業に活かしたいと思う。

執筆者略歴

バゼル山本 登紀子（ばぜるやまもと ときこ）

ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部日本研究専門司書

静岡県島田市出身。東京女子大学英米文学科卒業。1982年州立南イリノイ大学カーボンデール校言語学修士課程卒業。1986年より野村総合研究所ワシントンDC支店勤務。その間地元カソリック大学にて図書館情報学修士号取得。1996年までリサーチライブラリアンとして同研究所に勤務。1996年6月よりアメリカン大学ワシントンDC図書館でビジネス・レファレンスライブラリアンとして勤務。1999年1月より州立ハワイ大学マノア校図書館勤務。1999年6月より現職。